文芸特別展

島崎藤村と木下尚江

ー伊東一夫博士からの伝言ー

「島崎藤村　講演記念」
（馬籠藤村記念館提供）

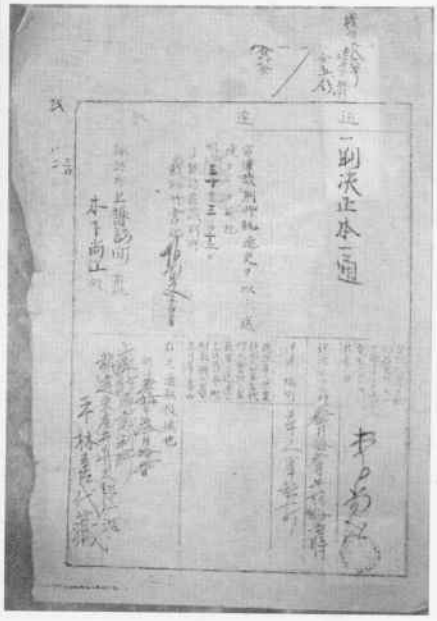
大正6年10月23日　諏訪郡玉川村（現茅野市）の玉川小学校の講堂で講演会が開催された。聴衆は200名、演題は、「学問の精神」であった。木曽福島の代官山村素門公の事績を主に、1時間半ほど講演した。

上の写真は、馬上左から藤村、鶏二、楠雄。

「木下尚江　代言人時代」
（木下家提供）

明治26年に、尚江は代言人（現在の弁護士）試験に合格した。

明治28年、諏訪郡上諏訪町（現諏訪市）に木下法律事務所諏訪出張所を開いた。右の資料は、明治30年3月13日付の上諏訪町木下尚江宛の判決正本の送達状（松本市歴史の里蔵）。右下に尚江の署名がある。



開催の趣旨

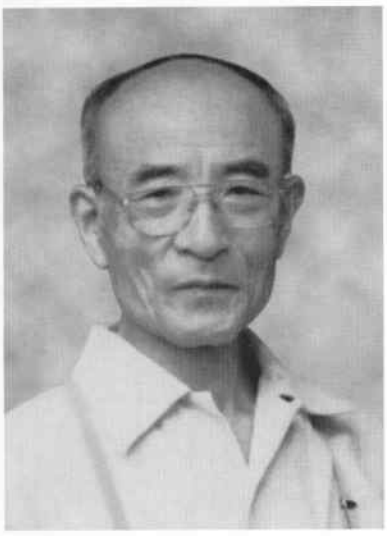
平成十六年(二〇〇四)七月、島崎藤村の研究家である東洋大学名誉教授の故伊東一夫文学博士が来館され、木下尚江の直筆未公開書画数十点を当館に寄贈された。

その折、諏訪地方にゆかりが多く、新聞記者、弁護士として全国的に知られた木下尚江と青年の求めに応じて当地方を度々訪れた島崎藤村について、当館の博物館専門委員でもある伊東博士から提言がなされた。

「二人は青年時代にキリスト教の洗礼を受け、文筆を通じて社会改革をめざした。藤村は穏健(コンサーバティブ)に、尚江は急進的(ラディカル)に実践した」、また「晩年にはともに仏教に近づいた」など、その思想活動の源泉にして、意外に知られざる二人の共通点に光をあてた展示会開催のご示唆をいただいた。その一ヵ月後、伊東博士は急逝されたのであった。

この度の文芸特別展は、敬虔なクリスチャンの故伊東一夫博士のご遺志を継ぎ、開催することになった。

茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館
茅野市八ヶ岳総合博物館



伊東一夫博士

伊東一夫博士　略年譜（藤村研究を中心に）

大正三年(一九一四)　十一月三日　長野県諏訪郡下諏訪町に誕生。

昭和八年(一九三三)　十八歳　旧制長野県立諏訪中学校(現長野県諏訪清陵高等学校)卒業。上京。

昭和十五年(一九四〇)　二十五歳。私立東洋大学文学部卒業。同大研究科副手。近代文学思想史専攻。

昭和十六年(一九四一)　二十六歳。帰郷。長野県立松本高等女学校(現長野県松本蟻ヶ崎高等学校)に赴任、国語教諭(〜一九四四)。旧制諏訪中学校(現長野県諏訪清陵高等学校)教諭(一九四五〜一九五八)。

「藤村は小説家、私一夫は研究家としてわが師藤村を追求しよう」と決意する(江戸川大学新井正彦先生による)。

昭和三十一年(一九五六)　四十一歳。東洋大学文学部国文科非常勤講師に就任。翌年から青山学院大学講師を兼務。

昭和三十四年(一九五八)　四十四歳。上京。東洋大学助教授。藤村研究の完成を期す。

昭和三十七年(一九六二)　四十七歳。「島崎藤村研究」により文学博士を授与される。博士論文は『島崎藤村研究』として出版。

昭和三十八年(一九六九)　四十八歳。藤村没後二十年を機に、藤村研究誌「風雪」を創刊。

昭和四十四年(一九六九)　五十四歳。東洋大学教授に就任(一九八五まで)。

昭和四十七年(一九七二)　五十七歳。『島崎藤村事典』を編集出版。

昭和四十九年(一九七五)　五十九歳。島崎藤村研究会(後の島崎藤村学会)創設。初代会長に就任。

昭和六十年(一九八五)　七十歳。東洋大学教授退職。新設の江戸川女子短期大学(現江戸川大学)教授に就任(〜一九九五)。同年四月一日東洋大学名誉教授。

昭和六十二年(一九八七)　七十二歳。『文芸の構造』刊行。東洋大学での講義「文芸概論」を集大成した。見返しに『夜明け前』の原稿を掲載。

平成十年(一九九八)　八十三歳。『島崎藤村コレクション(全四巻)』(伊東一夫・青木正美編著)を刊行。

平成十六年(二〇〇四)　九月十七日召天。八十九歳。二十一日、日本基督教団境南教会にて葬儀。平松良夫牧師が司式。

島崎藤村書簡
（当館蔵）
昭和6年　伊東一夫宛

「簡素に」

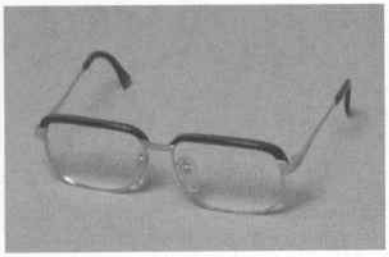
伊東が旧制諏訪中学校生のとき、藤村に弟子入りを願う書簡を送った。右の書簡とともに藤村からの返信に励まされ、伊東は藤村研究に生涯を捧げることになった。

島崎藤村書簡　（当館蔵）

昭和6年1月6日　伊東一夫宛

「誰でもが太陽であり得る、わたし達の急務は、ただ眼前の太陽を追ひかけることではなくて、自分等の内に高く太陽をかゝげることだ」

島崎藤村　大正14年1月28日付の朝日新聞に掲載の「春を待ちつつ」からの抜粋が書かれている。

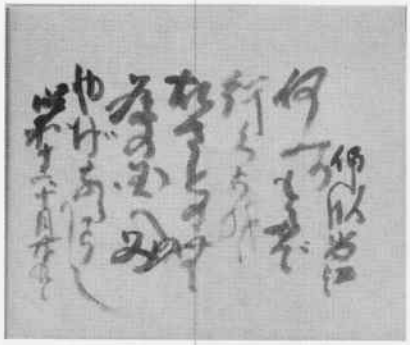


伊東一夫博士愛用の眼鏡
（当館蔵）

島崎藤村と木下尚江

木下尚江（木下家提供）

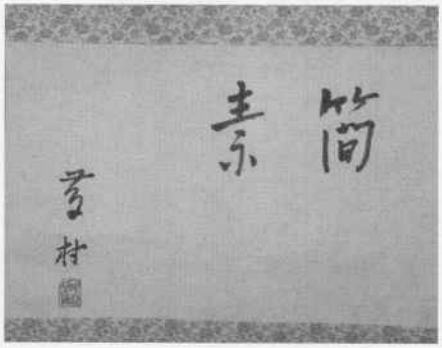
島崎藤村（馬籠藤村記念館写真提供）



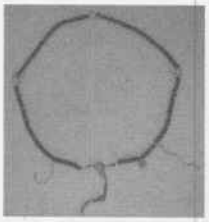
尚江　辞世の句（木下家蔵）
「何一つもたで行くこそ故さとの無為の国へのみやげなるらし」
昭和12年10月29日

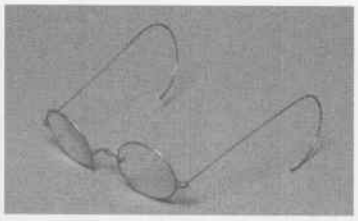
「無為の国」とは、岡田虎二郎の「静坐無為国」（治めずして治まる国）

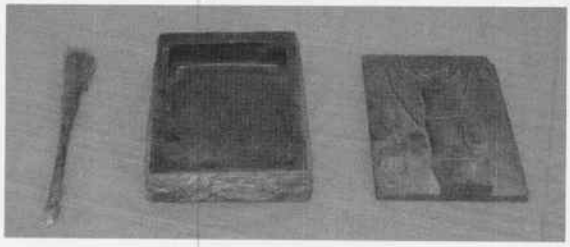
尚江　自画像（木下家蔵）
「如露如電」
昭和12年10月30日



藤村　自筆掛物（馬籠藤村記念館写真提供）
「簡素」



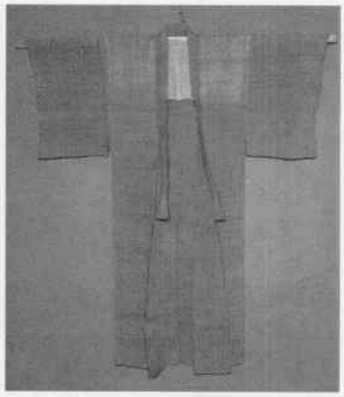




尚江愛用品　数珠　眼鏡　硯と筆（木下家蔵）

新約聖書（松本市歴史の里蔵）
昭和11年に尚江の妻みさ子が亡くなった際に尚江が配布した。

数珠（写真当館蔵）
藤村が島崎こま子に贈った数珠

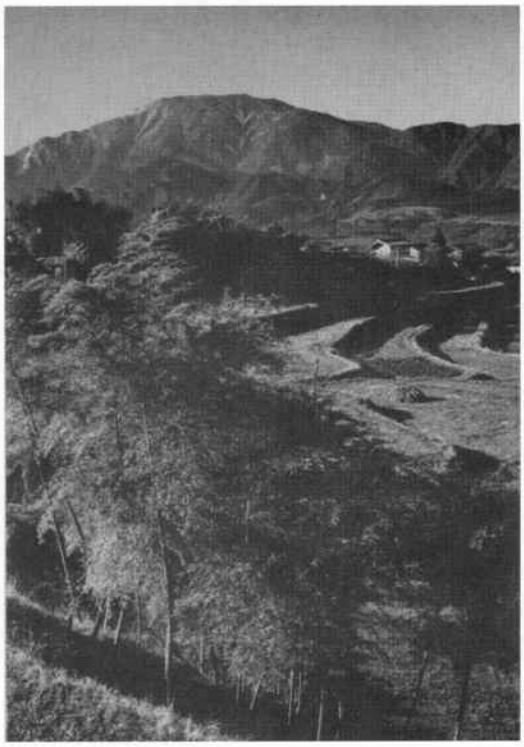


藤村愛用品　浴衣（当館蔵）
昭和3年藤村と加藤静子の結婚の際に加藤家から記念に贈られた芭蕉布でできた浴衣。

藤村愛用品　筆（馬籠藤村記念館蔵）

二人のふるさと

開智学校（現松本市）
尚江は、明治2年信濃国松本に生まれ、明治9年に開智学校に入学した。



馬籠と恵那山（現中津川市）
（馬籠藤村記念館提供）
藤村は、明治5年に木曾の馬籠に生まれた。

明治十九年の春、はじめて東京に出でたる時
保福寺　峠に立ちて　故さとの
山の偉大を　はじめて見たり
郵便の　がたくり馬車に　たゞ一人
浅間の裾野　ひねもす旅す
東京に　汽車つくらしく　王子あたり
棕櫚の廣葉を　珍らしと見き

『木下尚江遺稿 病中吟』
（当館蔵）
昭和12年　尚江が口述した。信州から東京へ出る際の保福寺峠を越える歌も掲載されている。

藤村著『ふるさと』
（当館蔵）
大正9年刊
実業之日本社

新茶屋の碑「是より北　木曽路　藤村老人」
（馬籠藤村記念館提供）
藤村自筆　昭和15年揮毫　昭和32年ふるさと友の会により建立。

尚江の家族　（木下家提供）
左より、妻みさ子、尚江、母汲

尚江の父　秀勝
（木下家提供）

「藤村上京時の記念写真」
（馬籠藤村記念館提供）
明治14年。前列右より、島崎友弥（三兄）、高瀬慎夫（姉園の長男）、藤村（9歳）、大脇吉次郎（馬籠大黒屋の次男）、後列右より、島崎広助（次兄）、島崎秀雄（長兄）

二人の青年時代

藤村は、明治十四年（一八八一）に上京し、東京市立泰明小学校に通い、卒業後は、三田英学校（現錦城学園高等学校）から尋常中学共立学校（現開成高等学校）を経て、明治二十年（一八八七）に明治学院普通部本科（現明治学院大学）に入学した。当時の学院は、教授陣の三分の二が米国人教師であった。毎週英語演説会や討論会があった。藤村は、二年生のころまで定期テストが九十五点平均の秀才といわれた。後半はシェイクスピア、ワーズワース、バイロン等を耽読、次第に文筆活動をめざす素地を身につけていった。学院卒業後は、文芸雑誌「文学界」に参加し、明治二十五年（一八九二）に明治女学校の教職につき、英語・国語を教えた。

尚江は、明治十九年（一八八六）に長野県中学校松本支校（現長野県松本深志高等学校）を卒業すると、少年時代に読んだ『万国史』に登場するクロムウェルの革命精神を学ぶため、同年三月に上京し、英国法の授業のあった英吉利法律学校（現中央大学）に入学するものの、同年四月「英国憲法」の講義のある東京専門学校（現早稲田大学）へ中途入学した。東京専門学校では、法律のほか、坪内逍遥などを通して文学も学んだ。大学を卒業し、帰郷すると「新府日報」などの新聞記者を勤めながら、明治二十六年（一八九三）に代言人（現在の弁護士）となった。

「成績優秀賞」　（木下家蔵）
明治21年7月20日　尚江が東京専門学校（現早稲田大学）卒業の際に送られた。

「得業証書」　（木下家蔵）
明治21年7月20日　尚江の東京専門学校（現早稲田大）卒業証書

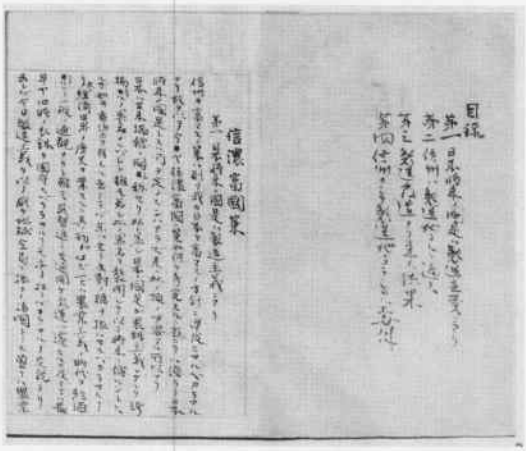
「学友達と」
（馬籠藤村記念館提供）
明治21年　下段左端が藤村16歳　この年6月17日、木村熊二から洗礼を受け、高輪台町教会に属す。学院の同級生に戸川秋骨、馬場孤蝶らがいた。

女學雜誌第二百九十八號

雜錄

万國婦人慈善會々頭
フランセス、ウイラードを訪の記

「女学雑誌　298号」
（臨川書店復刻　国立国会図書館蔵）
明治25年　藤村が翻訳をしたものが、初めて掲載された。



尚江自筆原稿　『信濃富国論』
（早稲田大学文学学術院提供）
明治24年　長野にて執筆した。

「明治女学校卒業記念」
（馬籠藤村記念館提供）
明治女学校卒業記念　前列左端が藤村。
藤村は13年の教師生活で『若菜集』『一葉舟』など詩集を次々に発行するとともに、「女学雑誌」「文学界」その他に、30数篇もの翻訳や作品の紹介をした。
西欧文学とその思想を紹介するかたわら、詩人からやがて小説家に変貌をとげるうえで教師体験は大きな基盤となっていた。

「松本美以教会会員簿」
（日本基督教団松本教会提供）
明治26年10月22日
尚江は、中田久吉牧師から洗礼を受ける。

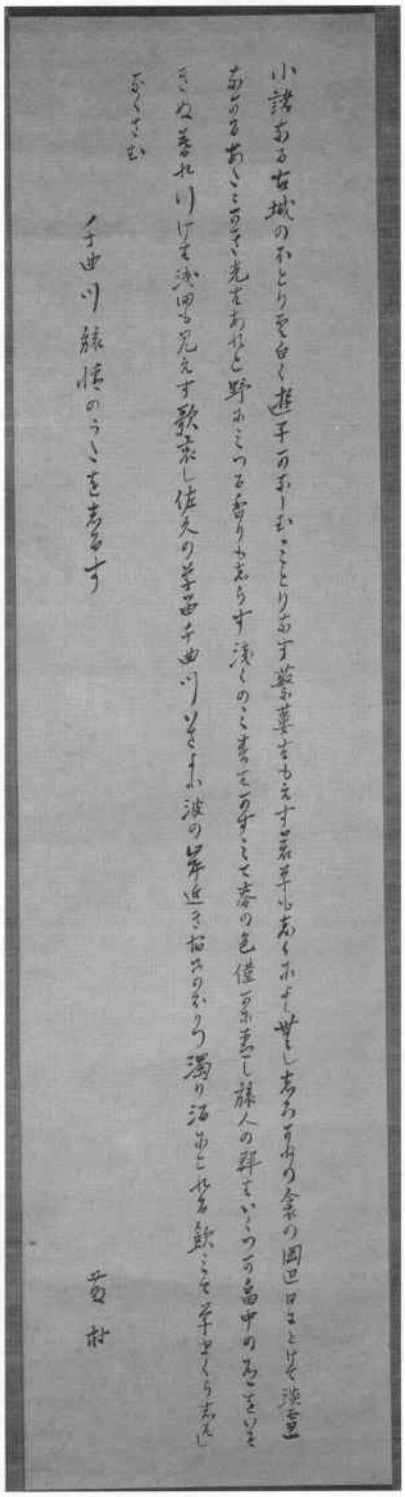
島崎藤村
（馬籠藤村記念館提供）
明治30年11月
25歳

藤村著『夏草』
（当館蔵）
明治31年刊

藤村著『若菜集』
（当館蔵）
明治30年刊　この処女詩集で連作の一つ「おつた」に登場する"世に孤児の吾身"とは、孤女学院に引き取られた震災孤女「おつた」がモデルである。

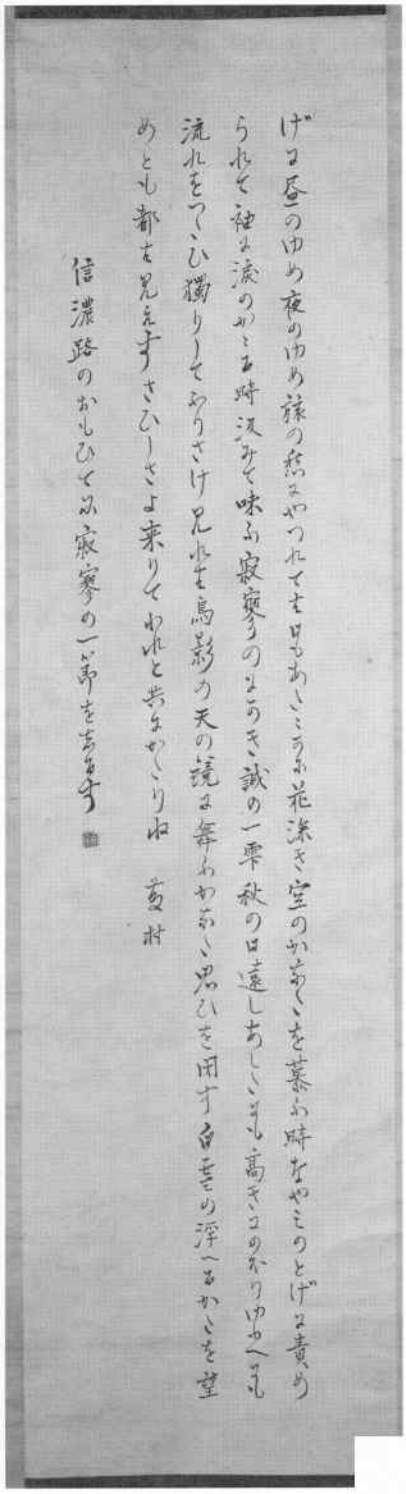
藤村著『落梅集』
（当館蔵）
明治34年刊　藤村最後の詩集

藤村著『一葉舟』
（当館蔵）
明治31年刊



藤村　自筆掛物
（個人蔵）
『落梅集』の「小諸なる古城のほとり」が揮毫されている。

「小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る・・・」



藤村　自筆掛物
（個人蔵）
『落梅集』の「寂寥」の一節が揮毫されている。

「げに昼の夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き・・・」

藤村作詞「明治学院校歌」
（馬籠藤村記念館提供）
明治39年
前田久八作曲

北村透谷

（堀越宏一氏提供　町田市立自由民権資料館協力）

明治元年（一八六八）十一月に、神奈川県小田原市に生まれる。本名は、門太郎。明治十六年（一八八三）東京専門学校（現早稲田大学）政治科に入学し、自由民権運動に身を投ずるが、離脱する。明治二十一年（一八八八）には、大恋愛の末石坂美那と結婚した。

藤村は、藤村の出身校でもある泰明小学校出身の透谷と明治二十五年（一八九二）に初めて明治女学校校長の巌本善治の家で会ってから、藤村は透谷に兄事した。

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり」ではじまる透谷の「厭世詩家と女性」（「女学雑誌」明治二十五年（一八九二）二月六日発行　三〇三号、二月二〇日発行三〇五号）は、「まさに大砲をぶちこまれた様なものであった」（「福沢諭吉と北村透谷―思想上の二大恩人―」「明治文学研究」一号所載　昭和九年（一九三四）一月一日）に尚江が語ったように藤村も大きな衝撃を受けた。恋愛を神聖なものと言い出し得なかったキリスト教的青年であった藤村や尚江に与えた影響ははかり知れないものであった。

そして、明治二十七年**（一八九四）**五月十六日の親友透谷の自殺は、藤村に衝撃を与えた。透谷の死そのものが、藤村を文筆活動に向かわせる出発点となったともいわれる。藤村は、後に「文章世界」（大正元年（一九一二）十月）に「北村透谷の短き一生」を寄せている。

藤村著『春』
（当館蔵）

明治41年刊
藤村最初の自伝的小説。この小説に登場する青木のモデルが北村透谷と言われる。

「女学雑誌　303号」（臨川書店復刻　国立国会図書館蔵）明治25年発行

相馬黒光

（株式会社中村屋提供）

明治九年（一八七六）九月十二日、宮城県仙台市生まれ。本名は良（りょう）。仙台神学校で、日曜学校を開いていた島貫兵太夫と出会い、受洗した。当時から「アンビシャスガール」と呼ばれた。明治二十四年（一八九一）に入学した宮城女学校（現宮城学院高等学校）を退学したあと、横浜のフェリス和英女学校（現フェリス女学院高等学校）に入学した。すぐに、明治二十八年（一八九五）明治女学校に再び転校して明治三十年（一八九七）に卒業した。「黒光」のペンネームは、横溢する才気を黒で包むようにと明治女学校校長の巌本善治の命名と伝えられる。

明治三十年（一八九七）に尚江の学友相馬愛蔵と結婚し、長野に移り住んだ。長野で愛蔵から最初に紹介された人物が当時松本に事務所のあった代言人の尚江であった。

四年後の明治三十四年（一九〇一）夫とともに病気療養を理由に上京し、ミルクホールを東京大学正門前に開業した。クリームパンの製造販売に成功し、新宿に本店を置く株式会社中村屋に至る。中村屋には、「中村屋サロン」と呼ばれる芸術家たちの交流の場があり、当時東京に移っていた尚江をはじめとして、荻原守衛（碌山）などが集った。黒光は、昭和三十年（一九五五）三月二日、七十九歳で亡くなった。

尚江は「病中吟」の「相馬君夫妻」のなかで、

黒光女史　もと詩性の女
自ら求めて　田園の婦となる
観察鋭利　批評深刻
還暦を過ぎて　孫一人
然かも深所に　處女の風吹く

と詠っている。

黒光著『黙移』
（山田貞光氏蔵）

昭和11年刊
「島崎先生の講義ぶり」の章では、「・・・けれど先生は深く悶えて一時学校を退き、ところ定めぬ漂泊の旅に出たり、また頭をそり落として円覚寺山内のお寺で法衣を着て東海道を歩いて行ったりなさったあとのことで、再びお兄様のお家の事情から教壇に立たれのでしたから、私はそれまで友達からきいたりして期待していた先生の講義に失望すると共に、「ああもう先生は燃え殻なのだもの、仕方がない」と思いました。友達もみんな島崎先生といえば「石炭がら」で不平を洩らしておりました。・・・」

黒光著『穂高高原』
（個人蔵）

昭和19年刊
「木下氏の心境」において「・・・殊に私などは年甲斐　もなくお叱りを蒙ることがたびたびで、罵倒されることも珍しくありませんが、『あなたのような女性は手におえない、相馬君はよくこんな駻馬を馴らしてきたものだ』

こうずけずけ言われることは不思議に腹の立たないものです。むしろ膿をもった腫物にブスリとメスを刺されたような激しい疼みを感ずると共に、何ともいえぬ痛快味をおぼえます。痛いところにはなるべくさわらないのが定石ですけれど、私のようなものの場合には、時にこの荒療治が必要であります・・・」

二人の社会改革

滝乃川学園

明治二十四年(一八九一)日本初の知的障害者福祉施設「滝乃川学園」が日本聖公会(キリスト教)の信徒・石井亮一によって創立された。石井亮一・筆子夫妻が打ち込んだこの学園は、幾多苦難を経て、現在国立市谷保に在る。

亮一は、慶応三年(一八六七)、佐賀水ヶ江(現佐賀県佐賀市)に生まれる。明治十七年(一八八四)立教大学入学、明治二十年(一八八七)芝聖アンデレ教会で受洗する。一方、筆子は、文久元年(一八六一)肥前大村岩船(現長崎県大村市)に生まれる。明治三十六年(一九〇三)に亮一と再婚し、両人は一緒に知的障害児教育に一生を捧げた。筆子は、昭和十二年(一九三七)六月十四日亮一が亡くなった後、戦時下の学園の運営にあたり、昭和十九年(一九四四)召天。

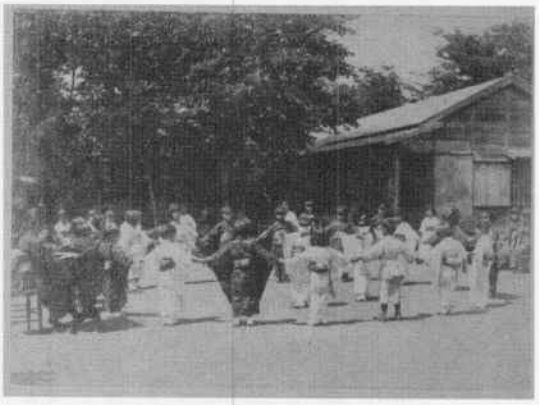
亮一は、明治二十四年(一八九一)の濃尾大震災後の十二月、被災地からの孤児の受け入れのため、滝乃川学園の前身にあたる「孤女学院」を借家の仮園舎で開設する。翌年滝野川村(現東京都北区)に施設が完成し、移転する。濃尾大地震の時に預かった孤児の中に知的障害をもった女児がいたことを契機に、知的障害児教育に特に関心を寄せることになる。昭和九年(一九三四)には、日本精神薄弱児愛護協会が結成され、初代会長に亮一が就任する。

当時巌本善治の経営する明治女学校の教師となった二十代の若き藤村が、学園に教え子とともに訪れ、勤労奉仕に汗を流し、寄付も行っていた。まぎれもないボランティア活動のはしりを示す実例であり、明治二十五年(一八九二)の事であった。

一方、尚江は明治三十二年(一八九九)三月二十四日から二日続きで、「毎日新聞」の記事「滝野川孤女学園を訪ふ」木下生を載せた。「(前略)年はまだ三十をいくつも越えないと思われる園主石井亮一氏の孤児院の設置目的を記す。(中略)開設の頃、濃尾地方に大地震が発生、初めて学園に来た孤女は十五人、その翌月には二十一人となり、以来入園孤児は増え続け、現在(明治三十二、三、二十四)在園するもの五十八人、この内四名は白痴者なり、(後略)」近代化でも最も遅れていた至難の社会事業分野であったが、尚江は亮一の事業に対する関心を喚起、啓蒙し社会改革しようとした。

石井筆子
(滝乃川学園 石井記念文庫提供)

石井亮一
(滝乃川学園 石井記念文庫提供)



滝野川村時代の学園(室外遊戯)
(滝乃川学園 石井記念文庫提供)
明治31年ころ

明治三十二年三月廿四

●滝野川孤女學園を訪ふ(上)

木下生

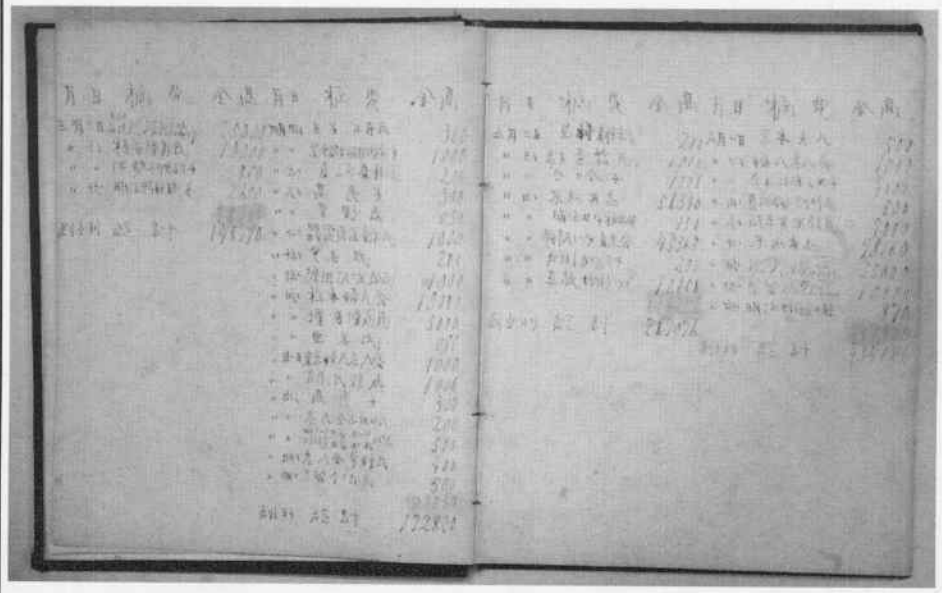
去廿一日春季皇靈祭の休み日なるを幸に余は一友と伴ふて玉子村に越けり散り殘る梅が香に名殘惜まんとに非ずまだき咲き匂ふ櫻やあらんとあてがるに非ず吾等が目的は滝野川なる孤女學園を訪はんが爲めにざありける

飛鳥の山を越へ黒川の流を渡り平蘆の間を行くこと數町にして其處にさゝやかなる一宇を見出しぬ小さき札に滝野川學園と記せるに其れと知りて門を入れば年倫は若かき一人の婦人が水汲み上げて物洗ひつゝあり彼方の垣、此方の軒に眺らかなる日影をたよりて掛け列ねたる小いさき寢物、戸の内なる棚に並べたる小いさき下駄何れか先づ人の心を打たざらん一老女に導かれて主人の室に至らんとすれば幼き子等の庭に散して鬨かつゝ遊ぶもあれば後に群れて摺鉢を圍みつゝ何やらん料理するもあり

毎日新聞　尚江記事「滝野川孤女学園を訪ふ(上)」
(国立国会図書館提供)
明治32年3月24日　翌25日に(下)が掲載される。

「濃尾大震災写真帖」中の高富町破壊状況
岐阜県歴史資料館提供

明治24年10月28日、美濃尾張中心に激震がおそった。マグニチュードは8.0、世界でも最大級の内陸直下型地震であった。地震は西は九州全土に、東は東北地方にまで達し、死者は全国で7,273人、全壊・焼失家屋142,000戸という大きな被害をこうむった。
各地にできた新聞社は競って震災情報を伝え、全国民の目を震災地に向けた。被害の大きさを知った国民は、医療ボランティアとして駆けつけたり、援助物資を寄せるなど、災害への連帯の輪が大きく広がった地震でもあった。



「有志寄附簿」　(滝乃川学園 石井記念文庫提供)
明治25年～31年。孤女学院への寄附者および寄附金額を石井亮一が学院創立当時から記した帳簿。島崎春樹(藤村)の名前が見える。

破戒　普通選挙運動・廃娼運動

『破戒』刊行の年　神津家の庭にて
（馬籠藤村記念館提供）
明治39年11月。右より、藤村、神津猛、田山花袋、鮫島晋、神津てう（猛の妻）、中沢べん（てうの姪）。

藤村著『破戒』のロシア語版
（馬籠藤村記念館提供）
昭和6年刊

藤村著『破戒』
（当館蔵）
明治39年3月刊

社会的偏見に藤村がいだいた内奥の苦悩を投影した『破戒』の出版は大きな反響を呼んだ。この作品の出現は、わが国自然主義文学の出発点となり、同時に藤村は詩人から本格的な散文作家へと転身した。

平民新聞の第三十八号明治三十七年（一九〇四）七月三十一日付で、尚江は、「詩人島崎藤村君亦こゝに坐して常に詩神に接す、藤村君令室を携へて北海道に赴いて在らず、余独り之を遺憾となす、聞く君の腹中既に一個小説の長篇結構成れりと、篇中新平民の境遇に満腔の同情を寄するものあり、数々新平民を歴訪して実地の研究を試みしと云ふ、其の梓成りて市に上るの日は、必ず我が文界に一新異彩を放つならん」と「小諸より」と言う題で『破戒』の予告をしている。

尚江は弁舌さわやかに、普通選挙運動、禁酒・廃娼運動、非戦論、足尾鉱毒問題にと向かう姿勢は、同志とともに、常に庶民の側に立ち、鋭く激しかった。演説会の多くは、政府の監視の下で行われた。

普通選挙運動では、尚江は、明治三十年（一八九七）七月に普通選挙運動を中村太八郎らとともに松本で普通選挙期成同盟会を結成し、尚江が執筆した「普通選挙ヲ請願スルノ趣意」が頒布された。太八郎と尚江の検挙により普通選挙運動は一旦頓挫するが、明治三十二年（一八九九）に東京で普通選挙期成同盟会が再び結成される。

島田三郎・木下尚江著『廃娼之急務』
（山田貞光氏蔵）
明治33年刊
共著だが、本文は全て尚江の執筆といわれる。

尚江自筆原稿
「自由党の『存娼』運動（一）」
（木下家蔵）
明治33年7月14日毎日新聞所載とある。

「石川半山・木下尚江他」
（木下家提供）
上段右が半山、下段右が尚江。半山は、明治27年長野松本の「新府日報」の主筆を勤め、島田三郎の毎日新聞などの記者も勤める。

○「破　戒」

島崎藤村君の小説『破戒』出でぬ。彼は日本の民心を内部より嚙み破りつつある人種的僻見「穢多」に向て其彩筆を揮ひたり。彼は之を市に出だす迄に二年を費やしぬ、吾人は著者の着眼と用意と著作其物と總て眞摯健實なることを感謝すると同時に、其の民心に反響する功果の大ならんことを祈らざるべからず。

尚江著　新紀元第7号『破戒』の評
（山田貞光氏蔵）
明治39年5月10日発行

島田三郎

（国立国会図書館のホームページ画面から転載）

嘉永五年（一五八二）江戸に生まれる。昌平坂学問所、沼津兵学校、大学南校、大蔵省附属英学校で学び、明治七年（一八七四）横浜毎日新聞に入社し、後に主宰する。

明治十四年（一八八一）東京横浜毎日新聞社に入社。明治二十三年（一八九〇）第一回総選挙で衆議院議員に当選、以後連続十四回当選する。自由民権論を主張し、立憲改進党創設に参加した。大正四年（一九一五）衆議院議長。毎日新聞社長として、廃娼運動、足尾鉱毒事件を取り上げるなどジャーナリストとしても知られている。大正十二年（一九二三）に没した。

キリスト教社会改革者として尚江の理解者であり同志でもあったが、立場を異にする場面も多かった。明治三十三年（一九〇〇）の選挙法改正の際、島田三郎は普通選挙時期尚早としていたが、尚江は雑誌や演説会で普通選挙を民主主義の「兵器」と位置づけ盛んに主張した。日露戦争に絶対非戦論を唱える尚江に対し、島田は自衛を理由に善戦論に変わった。

火の柱
良人の自白

尚江著　『火の柱』
（松本市歴史の里蔵）
明治37年刊

尚江著　『良人の自白』
（松本市歴史の里蔵）
明治37年刊

尚江著　'Pillar of Fire'
（松本市歴史の里蔵）
昭和47年刊「火の柱」の英語版

『火の柱』は、当時の非戦論の代表的作品である。短編を、日露戦争のさなか明治三十七年（一九〇四）一月一日から三月二十日までの間で、毎日新聞に連載した。

キリスト教社会主義の新聞記者が主人公。題名の『火の柱』は、旧約聖書 出エジプト記十三章十七―二十二の「主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。昼は雲の柱が、夜は火の柱が、民の先頭を離れることはなかった」からとったと考えられる。

『良人の自白』は、上編　下編　続編とある。非戦論の第二弾とも言うべき作品。いずれも毎日新聞に掲載された。続編は「新曙光」という原題で掲載された。フランス文学者吉江喬松（孤雁）の父と生家がモデルとなっている。

明治四十三年（一九一〇）九月三日、『火の柱』『良人の自白』とも発売禁止となった。

臼井吉見著
『安曇野』
（個人蔵）

第1部昭和40年刊　昭和39年から10年かけて「中央公論」や「展望」に連載された明治後期から昭和にかけての近代日本を安曇野を舞台に描いた大河小説。木下尚江や相馬愛蔵・黒光夫妻、荻原守衛などが登場する。
尚江が、荻原守衛に「藤村に負けたとかなんとか・・・」と聞かれ、『うたたね』を読んで「とうてい藤村にゃかなわないと観念したよ」と答えるシーンがある。

『うたたね』と『一夜の仮寝』

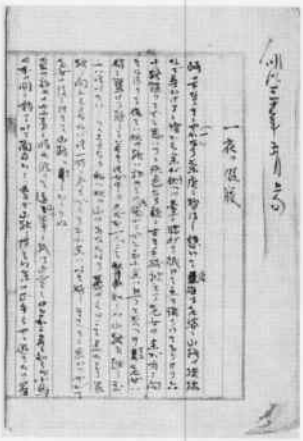
藤村の処女小説『うたたね』は、明治三十年（一八九七）十一月五日の作品。言文一致体を用いた。森鴎外に酷評された作品で世間に反響をよばなかったが、文体から小山内薫は新鮮なものをうけたという。厭戦的な内容の短編小説である。

尚江の短編小説『一夜の仮寝』は、明治三十年（一八九七）五月執筆の未発表作品。柳田泉によって発掘される。「尚江が普選運動の準備中のすさびといえる（昭和三十年（一九五五）七月、岩波書店「文学」、柳田泉）」。戦争に生活をうちひしがれた民衆のなげきを描いた作品。

新小説『うたたね』に「女学雑誌第四五三号、明治三十年（一八九七）十一月十日では、以下の評を掲載している。

「『うたたね』は島崎藤村の小説に於ける初作なるが、通篇一種の異形を放てるが如きの観ありて、描き出されたる人物の性格、それぞれ見るべきあり。新体詩に於ける藤村、今やまた小説に於いて妙手腕を振はんとするか。吾人は君によりて、今の寂寥なる小説界をにぎはし、こゝに一霊光を映じ来るあらんことを望むものなり。」

藤村著
『うたたね』新小説第
２年第１２巻
（馬籠藤村記念館蔵）
明治34年11月刊



尚江自筆原稿
『一夜の仮寝』
（早稲田大学文学学術院提供）
明治30年5月上旬

幸徳秋水と木下尚江

幸徳秋水
（四万十市立図書館提供）

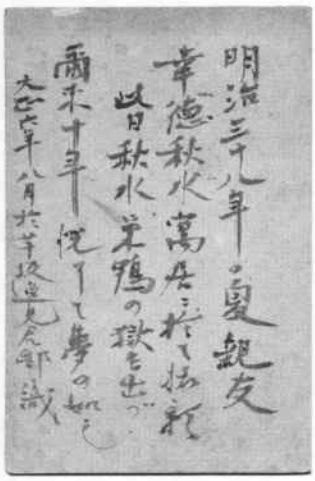
明治四年（一八七一）九月二十三日、高知県幡多郡中村町（現四万十市）に生まれる。九歳にして漢文を習得し、自由民権を論じていたといわれる。中学校中退の後、上京、林有造の書生となり自由民権運動に参加した。中江兆民に師事し、「自由新聞」などで、豊富な漢籍の知識を持った文章力で記者としてその地位を確立していった。中江兆民からの影響を受けた自由・平等・博愛の精神に則って、明治官僚国家を痛烈に批判し、日露戦争には、内村鑑三、堺利彦らとともに「非戦論」の立場を貫き、秋水は「万朝報」を退社し、堺利彦や尚江たちと「平民新聞」で活躍した。

明治三十八年（一九〇五）年の渡米後は、ロシア第一革命の影響を受け、議会主義の立場を離れ、無政府主義の「直接行動」を唱えた。明治三十四年（一九〇一）に発行された秋水の著作『廿世紀之怪物帝国主義』には、反帝国主義・非戦論がまとめられる。明治四十三年（一九一〇）六月一日「大逆事件」に連座して捕られた秋水は、明治四十四年（一九一一）一月二十四日、処刑される。また、それまでキリスト教の影響が強かった日本の社会主義運動に対し、『基督抹殺論』を執筆した。秋水の刑死の後に発行されたこの書は、科学的・戦闘的社会主義の確立を唱えたキリスト教批判の書である。

尚江は、明治三十三年（一九〇〇）に石川半山宅で始めて秋水に会う。その後、秋水、安部磯雄などと明治三十四（一九〇一）年五月十八日に「社会民主党」を結成するが、二十日には結社禁止命令が出された。二人は、「幸徳の筆、尚江の舌」と称されるほどであった。尚江は、晩年の昭和八年（一九三三）に「幸徳秋水と僕」を発表し、翌年『神・人間・自由』に収録した。この中で尚江は、「基督抹殺論を読む」が尚江人生最後の演説だったことを告白している。また、秋水から尚江は、「木下。君、どうぞ神を捨てて呉れ。君が神を捨ててさえ呉れれば、僕は甘んじて君の靴のひもを解く。」と言われたことを『神の解放』（昭和八年（一九三三））に述べている。

非軍備論

毎日新聞　尚江記事「非軍備論」
（国立国会図書館蔵）
明治36年5月19日



木下尚江　写真　（木下家蔵）
明治38年7月28日　幸徳の出獄を迎えた。左は、裏書き。

「社会民主党の創立発起人」の写真
（法政大学大原社会問題研究所所蔵）
明治34年5月　前列左から安部磯雄、幸徳秋水、片山潜、後列左から河上清、尚江、西川光二郎

「新紀元　創刊号」
（国立国会図書館蔵）
明治38年11月10日　新紀元が刊行される。尚江は、巻頭で「日本国民の使命」と「目前の二大急務」の2本の論文を掲載した。二大急務は、「万国平和会議の提唱」と「普通選挙の実施」であった。全13号。

田中正造と足尾鉱毒事件

毎日新聞　尚江記事「足尾鉱毒問題（2）」　（国立国会図書館提供）
明治33年3月7日

田中正造と尚江　（木下家提供）
明治43年　中央が尚江。その右が田中正造。

田中正造
（木下家提供）

天保十二年（一八四一）十一月三日に栃木県小中村（現佐野市）で、旗本六角家の名主の家に生まれる。名主の正造は、明治十二年（一八七九）には、「栃木新聞」の編集長となる。明治十三年（一八八〇）に補欠選挙で栃木県議会に当選し、議員として、自由民権運動を進めた。

明治二十三年（一八九〇）の第一回総選挙で衆議院議員に当選すると、渡良瀬川沿いの人々の農作物や魚類に大きな被害を与えていた足尾銅山の鉱毒問題を繰り返し国会でとりあげた。しかし、国の政策は変わらず、国会議員を辞職し、明治三十四年（一九〇一）十二月十日、天皇に直訴した。この直訴文の執筆は幸徳秋水が行い、正造が加筆修正した。

その後正造は、谷中村の土地買収と遊水地化を止めようと、谷中村に住み、残留した農民とともに強制破壊された村の再建に取り組んだが、大正二年（一九一三）九月四日に七十一歳で亡くなった。遺品の信玄袋には、河川視察記の草稿と新約全書、鼻紙数枚、集めた川海苔、小石三個、日記三冊、帝国憲法とマタイ伝の合本が入っていた。

尚江は、明治三十三年（一九〇〇）三月に正造と毎日新聞社で面会し、すぐに足尾に特派員として現地取材を行い、毎日新聞に「足尾鉱毒問題」などの関連記事を二十日間にわたって多数発表した。尚江は看護した田中正造の死を看取るまで、鉱毒問題に関する演説、執筆から正造の秘書的な活動にいたるまで終始正造を援護した。尚江の正造についての著書には、大正十年（一九二一）刊の『田中正造翁』、昭和三年（一九二八）刊の『田中正造之生涯』がある。後書では正造の絶筆に筆を入れ、「悪魔を退くる力なきは、其身も亦悪魔なれば也。己に業に其身悪魔にして、悪魔を退けんは難し。茲に於て懺悔洗禮を要す。」と記した。

田中正造が尚江に贈った扇面
（木下家蔵）
明治42年7月
「妻を叱るものは
即ち其妻に叱らるる人ならん」

田中正造　自筆額
（木下家蔵）
「至誠」

キリスト教文学

藤村と尚江が並んだ近代日本キリスト教文学全集（教文館）の帯（三好行雄著）には、明治初頭に、日本で東西両異質文明が出会ったことに注目し、「キリスト教はその実質としての魂にかかわる課題を日本人に問いかけた。それは宗教であると同時に、ひとつの思想であり、いわば〈近代〉の明証として、青年たちを熱狂させるに足る観念でもあった」とある。藤村と尚江も明治を熱く駆け抜けていった。

尚江著『荒野』
（山田貞光氏蔵）
明治42年刊

尚江著『懺悔』
（松本市歴史の里蔵）
明治39年刊

藤村著『桜の実の熟する時』
（馬籠藤村記念館蔵）
大正8年刊　藤村の明治学院での学生々活が生々と描かれている。

近代日本キリスト教文学全集
3巻
（個人蔵）
昭和50年刊　木下尚江『火の柱』島崎藤村『桜の実の熟する時』の2作が収録されている。

夜明け前・東方の門

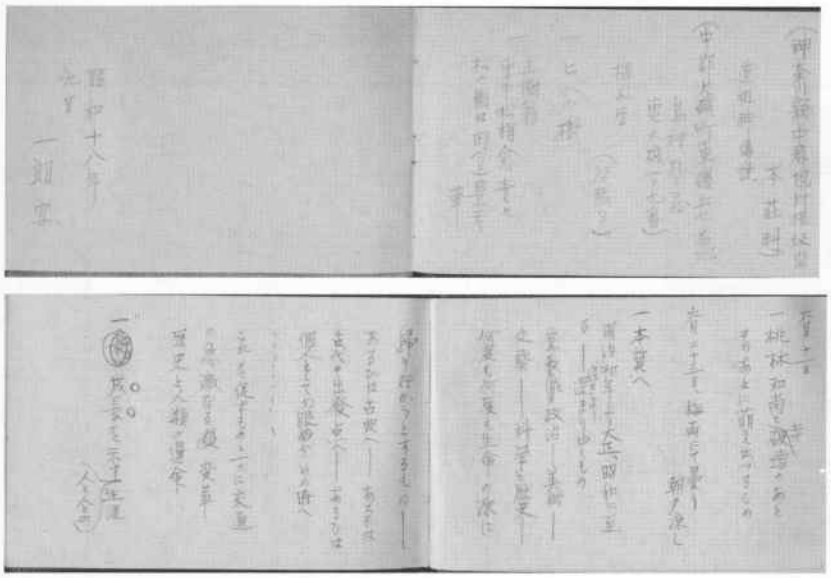
藤村著『夜明け前』
（当館蔵）
昭和7年第一部刊

「木曽路はすべて山の中である」で始まる『夜明け前』は昭和四年（一九二九）から昭和十年（一九三五）まで「中央公論」に足かけ七年に連載された。激動の江戸後期の嘉永六年（一八五三）から明治中期までの歴史と木曾の自然、そして馬籠に生きる人々を描いた。藤村の父正樹をモデルにした主人公青山半蔵の復古的精神は新時代の動きに合わず、半蔵は苦悩のはてに狂死する。

篠田一士は『『夜明け前』小編（藤村全集 月報）（昭和四十一年（一九六六）九月）の中で「この長大な小説は、藤村文学のなかに屹立する傑作であるばかりでなく、近代日本文学全体のなかでも五指に数うべき重要な傑作である」と記している。

また、吉田精一の『夜明け前』（「国文学解釈と鑑賞」昭和三十三年（一九五八）三月号）によれば「『夜明け前』のめざすところは藤村の視点で日本の近代史批判を書くこと。もう一つは藤村という一人の作家の実父の生涯に共感をこめた回想を書くことであった」とされる。

藤村は、昭和十八年（一九四三）に『東方の門』の連載を始め、第二章までが中央公論より発表された。絶筆。



「雑記帳」　（当館蔵）
藤村の晩年の創作ノート2冊を昭和18年に藤村の甥の一郎が写したもの。
（上）最後のページに「一郎写」とある。
（下）「一　本質へ・・・」と東方の門の創作メモが写されている

島崎正樹

藤村の父。教部省考証課御雇の後、水無神社宮司をした。明治十九年（一八八六）没。藤村に「千字文」など自作の手習帳で教えた。

藤村は、父正樹をモデルにその生涯を描く構成で『夜明け前』を書いた。宮地正人氏は、「明治維新の平田国学『夜明け前』の世界の平田国学」の中で島崎正樹の書簡類を紹介しながら「南信・東濃地域は幕末期では平田国学の最大の拠点となっていた。青山半蔵が「草莽の国学」の典型となるのは、歴史的にもまったく正しいことなのである。」と書いている。

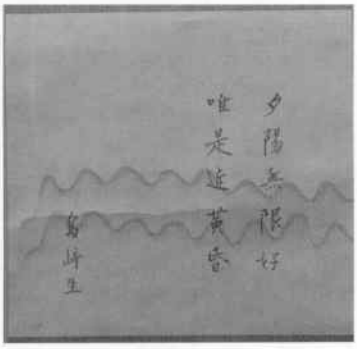
「島崎正樹」
（馬籠藤村記念館提供）
明治10年頃
右が正樹

「島崎家訓」
（馬籠藤村記念館蔵）
明治18年
正樹自筆

処女地と島崎静子

「処女地」は、藤村の後援した婦人雑誌。「わたしたちの周囲にある空気は重い。窓を放て。自由な空気をそそぎ入れよ。」ロマン・ローランの言葉を巻頭に掲げた、女性により女性中心の教養誌。その中心になった一人に昭和三年（一九二八）に藤村夫人となった加藤静子もいた。

「処女地」
第一号
（当館蔵）
大正11年創刊
翌年10号で終巻した。



藤村　自筆掛物（当館蔵）
「夕陽無限好　唯是追黄昏」

島崎静子　自筆掛物
（当館蔵）
「明月」

右の「明月」とともに、藤村と静子夫人が婚約時に交わした言葉を書にしたものと伝えられる。

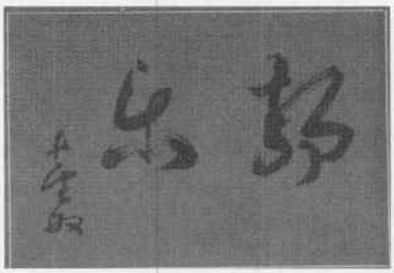
岡田虎二郎と静坐

明治五年(一八七二)に愛知県渥美郡田原町に生まれる。幼少期は虚弱体質で、最終学歴は、第二高等小学校補習科卒業。青年期は、「ひたすら見つめ観察する」という独特の方法で農業に打ち込み、その後人間教育へと視点が移っていく。

明治三十四年(一九〇一)単身渡米し、語学を学ぶ。ヨーロッパ経由で明治三十八年(一九〇五)帰国。翌年三月の長女誕生数日後に離婚する。物質的に生きる商家の山本家と霊的に生きる虎二郎とのギャップによるともいわれる。明治三十九年(一九〇六)、山梨県の内藤分次郎宅に寄宿し、山中で黙坐し、さらに、東京の兄藤十郎宅また上野の松井宅にてひたすら静坐日々を送る。

明治四十年(一九〇七)ころ、難病の青年や発狂した青年を治したことから、静坐会場には、多くの人が押しかけるようになった。明治四十三年(一九一〇)に田原正坐会が発足。尚江や田中正造、相馬黒光など多くの知識人たちも、虎二郎の静坐会に来るようになった。尚江は虎二郎を「これこそ我が師」と仰いだ。また、正造は"岡田式神呼吸"と評し、虎二郎を聖人化している。

明治四十五年(一九一二)に『岡田式静坐法』が出版されたが、大正九年(一九二〇)十月十四日、四十九歳で急死した。尚江は、虎二郎没後、静坐会の後継者となっている。明治四十四年(一九一一)に、尚江は「岡田さんの静坐は、つまり此の混濁迷乱の世に「道」を自知させる善巧方便だ」と「実業之日本」に書いている。



岡田虎二郎　額
（木下家蔵）
「静楽」と印刷してある。

岡田虎二郎
（木下家提供）

『岡田式静坐法』
（山田貞光氏蔵）
明治45年刊　尚江の「余が思想の一大転化は静坐の賜り也」が掲載されている。

日蓮論

明治四十三年(一九一〇)仏教に傾倒した尚江は、宗教改革者として日蓮を描こうとした。そして、『日蓮論』に続き、尚江は『宗教改革論』を予告したが、発行されることはなかった。明治四十四年(一九一一)に『法然と親鸞』が刊行される。

尚江著『日蓮論』
（山田貞光氏蔵）
明治43年刊

『藤村いろは歌留多』（復刻版）
（当館蔵）
昭和2年刊
岡本一平画
「いろはかるた　版権解放の阻止　この金は貧者へ」と近代文学館所蔵の「夜明け前」ノートにメモが残る。

共通する宗教観

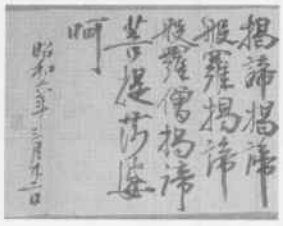
二十歳代でキリスト教プロテスタントの洗礼を受けた二人であったが、壮年期以降に仏教の奥義に近づいた。

伊東博士は晩年「藤村が晩年、『しづかにもえる』という「静思」に込めた信仰は、キリスト教、仏教のような特定の宗教、既存の宗教を超えた大いなる存在。即ち『霊』に行きついた。」と語っていた。

尚江は、晩年に写経にうちこみ、正坐にはげみ、『日蓮論』『法然と親鸞』など執筆した。尚江の信仰については、全集第八巻の解説中で鈴木範久氏が「「仏教とかキリスト教とか正坐とかの相異を超え、いかなる此世的な束縛から解放された自由な世界こそ、尚江の求めた心の王国であったのではないか。」と述べている。この世界も『霊的』と言い換えることができるかもしれない。

藤村も尚江も近代化を急ぐ日本のなかで、苦悩し「明治の覚り」とも言うべき宗教観を自ら得たのだろうか。

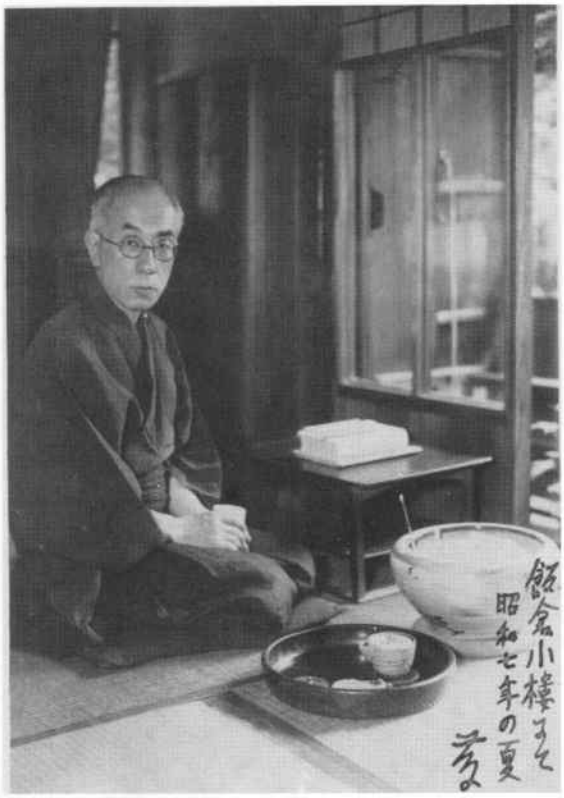
尚江　「写経」
（当館蔵）
昭和7年　「信心銘」が写経されている。



尚江　「写経」
（木下家蔵）
昭和6年　「般若波羅蜜多心経」が写経されている。

二人の晩節

木下尚江　（木下家提供）
昭和11年12月9日　西ヶ原の自宅にて。



島崎藤村　（馬籠藤村記念館提供）
昭和7年　麻布飯倉片町の自宅にて。

尚江著　『神・人間・自由』
（松本市歴史の里蔵）
昭和9年刊　「神の解放」「幸徳秋水と僕」「政治の破産者　田中正造」「自由の使徒　島田三郎」「文学の未だ無かった早稲田」など12編からなる。

尚江　自筆掛物　（木下家蔵）
昭和12年元旦　「上善如水」と揮毫されている。

ペンクラブと戦陣訓

六十三歳の藤村は、昭和十年（一九三五）に日本ペンクラブの会長に就任した。

その後、藤村は、昭和十六年（一九四一）に発行される「戦陣訓」の校閲に関わることになる。また、昭和十七年（一九四二）十一月三日に開催された「大東亜文学者大会」にて「聖寿万歳」を壇上にて三唱している。

これは、結成間もない日本ペンクラブの存続を図るため会長の立場で、苦渋の選択をしたと考えられる。また、昭和四年（一九二九）には、藤村の三男蓊助が日本プロレタリア美術家同盟の地方移動展に参加し、盛岡署に留置されたことなども影響があったと考えられる。

『勅語勅諭集』
（個人蔵）
昭和18年2月20日刊

『国民歌謡選集』
（個人蔵）
昭和12年6月10日刊
全16曲中に藤村作詞「椰子の実」「朝」の2曲が入っている。その他「日本よい国」「祖国の柱」などが収録されている。

息子正造への葉書

尚江は、晩年の昭和十二年（一九三七）早稲田大学を卒業し働く正造へ毎日葉書を出した。

左上は、三月二十五日のもの。右下は五月十四日の早稲田大学から卒業証書が届いたときのもの。左下は、六月十五日のもので、帽子をつけた男の絵が添えられている。

（木下家蔵）

●協力者一覧（敬称略・50音順）

本書作成及び特別展開催にあたり、下記の関係者ならびに関係機関の皆様のご協力ご指導を賜った。

（個人）

伊東くに・井出孫六・木下雅雄・腰原哲朗・増田かな・堀越宏一・山田貞光

（機関）

財団法人岐阜県教育文化財団歴史資料館・国立国会図書館・四万十市立図書館・信越放送株式会社・社会福祉法人滝乃川学園・東洋大学・株式会社中村屋・法政大学大原社会問題研究所・財団法人馬籠藤村記念館・町田市立自由民権資料館・日本基督教団松本教会・松本市立博物館・松本市歴史の里・株式会社臨川書店・早稲田大学中央図書館・早稲田大学文学学術院

●主な引用参考文献

筑摩書房「新装版 藤村全集」全巻 昭和48年
教文館「木下尚江全集」全巻 平成2年

文学 第23巻第7号 昭和30年
国文学 解釈と鑑賞 島崎藤村 昭和33年
信濃教育 第887号 特集木下尚江 昭和35年
山極圭司「評伝 木下尚江」昭和52年
研究社 現代英語教育 第19巻第3号 昭和57年
信州白樺 56号 木下尚江特集 昭和58年
伊東一夫・青木正美「島崎藤村コレクション」平成10年
馬籠藤村記念館「図録 島崎藤村」平成12年
栃木県立博物館・佐野郷土博物館
「田中正造とその時代」平成13年
大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会
「石井筆子の生涯」平成14年
清水靖久「野生の信徒 木下尚江」平成14年
村瀬裕也「東洋の平和思想」平成15年
国立歴史民俗博物館「明治維新と平田国学」平成16年

信望愛

大正3年 右より、みさ子、正造、尚江、純枝
（木下家提供）

大正5年7月 フランスより帰国して 東京芝二本榎の島崎広助（次兄）宅にて。右より、藤村、鶏二、楠雄、島崎やよ（広助の義母）、重樹（広助の長男）、権藤識子（藤村の弟子）、島崎こま子（広助の次女）
（馬籠藤村記念館提供）

平成18年度 文芸特別展

島崎藤村と木下尚江
－伊東一夫博士からの伝言－

■期間 平成19年3月27日（火）～6月24日（日）

■会場 茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館
（茅野市八ヶ岳総合博物館に併設）

■講演会「島崎藤村と木下尚江」
日時 平成19年5月4日（金）午後1時30分～
講師 井出孫六・腰原哲朗・山田貞光
（敬称略・50音順）

■展示解説
日時 平成19年4月15日（日）・6月17日（日）
午前10時～と午後2時～の2回

■発行日 平成19年3月27日

■編集／発行 茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館
茅野市八ヶ岳総合博物館
長野県茅野市豊平6983番地
電話 0266-73-0300

■印刷 永明社印刷所

例 言

◇本書は、茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館が主催した平成18年度文芸特別展「島崎藤村と木下尚江 －伊東一夫博士からの伝言－」の展示会図録である。
◇本書中の年齢は、満年齢を採用した。
◇本文の執筆は、吉田一雄（茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館）が行い、キャプションなどに大谷勝己（茅野市八ヶ岳総合博物館）の協力を得た。
◇本書の編集は、吉田一雄と大谷勝己が共同で行った。

参考文献（追加）

1	『安曇野』第1部	臼井吉見著	筑摩書房著	昭和49年刊
2	『島崎藤村』全3巻	田中富次郎著	桜楓社	昭和52年刊
3	『近代日本キリスト教文学全集　3』「木下尚江―火の柱―」「島崎藤村―桜の実の熟する時」		教文館	昭和50年刊
4	『藤村記念館五十年史』	財団法人藤村記念郷		平成9年刊
5	『島崎藤村　詩と美術』	腰原哲朗著	木菟書館	昭和52年刊
6	『島崎藤村論』	三好行雄著	筑摩書房	昭和59年刊
7	『島崎藤村論』	鈴木昭一著	桜楓社	昭和54年刊
8	『藤村の生涯　作品と芸術』	足立勇著	星文社	昭和29年刊
9	『東方の門』	藤一也著	沖積舎	平成11年刊
10	『藤村文学への新しい視座』	東栄蔵著	信州白樺	昭和59年刊
11	『藤村記念館文庫目録』	藤村記念郷　島崎緑二		昭和57年刊
12	『ひとすじのみち―島崎藤村とともに―』	島崎静子著	明治書院	昭和44年刊
13	『島崎藤村と佐久』	佐久教育会藤村研究委員会		昭和53年刊
14	『信州白樺　23号』特集　藤村			昭和51年刊
15	『女学雑誌　第303号』	女学雑誌社		明治25年刊
16	『深志人物誌』	松本深志高校同窓会		昭和62年刊
17	『生誕120周年記念　木下尚江資料展示目録』			平成元年刊
18	『信州の東京』	長野県人会連合会		平成17年刊
19	『木下尚江顕彰碑建立記念誌』	木下尚江顕彰会		昭和53年刊
20	『新紀元　第7号』			明治39年刊
21	『黙移』	相馬黒光著	栗田書店	昭和11年刊
22	『穂高高原』	相馬黒光著	栗田書店	昭和19年刊
23	『無名の人　石井筆子』	一番ケ瀬康子著・津曲裕次・河尾豊司編	ドメス出版	平成17年刊
24	『福祉に生きる　石井筆子』	津曲裕次著	大空社	平成18年刊
25	『福祉に生きる　石井亮一』	津曲裕次著	大空社	平成14年刊
26	『石井亮一と瀧乃川学園』	石井亮一没後五十周年		昭和61年刊
27	『瀧乃川学園　矢川だより　第83号』			平成19年刊

展示目録

1	写真　故伊東一夫文学博士			当館蔵
2	島崎藤村書簡	伊東が旧制諏訪中学校生のとき、藤村に弟子入りを願う書簡を送った。書簡とともに藤村からの返信に励まされ、伊東は藤村研究に生涯を捧げることになった。	昭和6年　伊東一夫宛	当館蔵
3	島崎藤村書簡	伊東章雄宛 島崎藤村　大正14年1月28日付の朝日新聞に掲載の「春を待ちつつ」からの抜粋が書かれている。	昭和6年1月6日	当館蔵
4	故伊東一夫博士愛用品　眼鏡			当館蔵
5	故伊東一夫博士愛用品　時計			当館蔵
6	故伊東一夫博士愛用品　旧約全書			当館蔵
7	故伊東一夫博士原稿	『島崎藤村コレクション　第3巻　藤村をめぐる女性たち』のもの		当館蔵
8	『島崎藤村コレクション　第3巻　藤村をめぐる女性たち』	伊東一夫著　国書刊行会発行	平成10年11月8日	当館蔵
9	『島崎藤村コレクション　第1巻　写真と書簡による藤村伝』	伊東一夫・青木正美著　国書刊行会発行	平成10年8月22日	当館蔵
10	『島崎藤村コレクション　第4巻　肉筆原稿で読む島崎藤村』	伊東一夫・青木正美編　国書刊行会発行	平成10年12月10日	当館蔵
11	写真　数珠	藤村がこま子に贈った数珠		当館蔵
12	色紙	長谷川（島崎）こま子筆		当館蔵
13	写真　島崎藤村			馬籠藤村記念館提供
14	写真　木下尚江			木下家提供
15	写真　藤村自筆掛物			馬籠藤村記念館写真提供
16	藤村愛用品　新約聖書			馬籠藤村記念館蔵
17	藤村愛用品　筆			馬籠藤村記念館蔵
18	年賀状	藤村筆	大正13年1月元日	個人蔵
19	尚江愛用品　眼鏡			木下家蔵
20	尚江愛用品　硯			木下家蔵
21	尚江愛用品　筆			木下家蔵
22	尚江愛用品　新約聖書	昭和11年に尚江の妻みさ子が亡くなった際に尚江が配布したもの。		松本市歴史の里蔵
23	写真　藤村記念講演	諏訪郡玉川村（現茅野市）の玉川小学校の講堂で講演会が開催された。聴衆は200人、演題は「学問の精神」であった。木曽福島の代官山村蘇門の事績を主に、1時間半ほど講演した。 写真は馬上左から藤村、鶏二、楠雄	大正6年10月23日	馬籠藤村記念館提供
24	写真　尚江代言人時代			木下家
25	当時の代言人の服装			松本市歴史の里蔵
26	藤村講演引受けの返事		大正6年10月15日	個人蔵
27	『玉川学校教育百年の歩み』	茅野市立玉川小学校「玉川学校教育百年の歩み」編集委員会編	昭和48年11月8日	当館蔵
28	判決正本の送達状	上諏訪町　木下尚江宛	明治30年3月13日付	松本市歴史の里蔵
29	馬籠と恵那山	藤村は、明治5年に木曽の馬籠に生まれた。（現中津川市）		馬籠藤村記念館提供

30	写真　新茶屋の碑「是より北木曽路　藤村老人」	昭和32年ふるさと友の会により建立。	藤村自筆昭和15年揮毫	馬籠藤村記念館提供
31	写真　馬籠藤村記念館前にある看板	血につながるふるさと心につながるふるさと言葉につながるふるさと		馬籠藤村記念館提供
32	尚江の父　秀勝			木下家提供
33	尚江の家族	左より、妻みさ子、尚江、母汲		木下家提供
34	『ふるさと』	島崎藤村著　実業之日本社	大正9年刊	当館蔵
35	複製　楠雄宛書簡	ふるさと馬籠に帰農した長男楠雄に宛てた藤村の書簡	大正15年2月4日	馬籠藤村記念館蔵
36	木下尚江遺稿　『病中吟』	尚江が口述した、信州から東京へ出る祭の保福寺峠を越える歌も掲載されている。	昭和12年	当館蔵
37	写真　開智学校		明治9年ころ	松本市歴史の里蔵
38	写真　開智学校	尚江は、明治2年信濃国松本に生まれ、明治9年に開智学校に入学した。		当館蔵
39	「卒業証書」	尚江の長野県中学校松本支校（現長野県松本深志高等学校）の卒業証書	明治19年2月13日	木下家蔵
40	「成績優秀賞」	尚江が東京専門学校（現早稲田大学）卒業の際に送られた。	明治21年7月20日	木下家蔵
41	「得業証書」	尚江の東京専門学校（現早稲田大）卒業証書	明治21年7月20日	木下家蔵
42	写真　藤村上京時の記念写真	明治14年。前列右より、島崎友弥（三兄）、高瀬慎夫（姉園の長男）、藤村（9歳）、大脇吉次郎（馬篭大黒屋の次男）、後列右より、島崎広助（次兄）、島崎秀雄（長兄）	明治14年	馬籠藤村記念館提供
43	写真　島崎藤村	明治学院入学の翌年　15歳	明治21年1月	馬籠藤村記念館提供
44	写真　「学友達と」	下段左端が藤村16歳この年6月17日、木村熊二から洗礼を受け、高輪台町教会に属す。学院の同級生に戸川秋骨、馬場孤蝶らがいた。	明治21年	馬籠藤村記念館提供
45	写真　「明治女学校卒業記念」	明治女学校卒業記念。前列左端が藤村。藤村は13年の教師生活で『若菜集』『一葉舟』など詩集を次々に発行するとともに、「女学雑誌」「文学界」その他に、30数編もの翻訳や作品の紹介をした。		馬籠藤村記念館提供
46	「松本美以教会会員簿」	尚江は、中田久吉牧師から洗礼を受ける。	明治26年10月22日	日本基督教団松本教会提供
47	複写『余ハ如何ニして基督教を信ずるニ至りしか』	木下尚江自筆原稿	明治24年6月8日	早稲田大学文学学術院提供
48	複写　「女学雑誌」298号　（3部）	明治25年藤村が翻訳をしたものが、初めて掲載された。		臨川書店復刻国立国会図書館蔵
49	写真　島崎藤村	25歳	明治30年11月	馬籠藤村記念館提供
50	『若菜集』	島崎藤村著 この処女詩集で連作の一つ「おつた」に登場する"世に孤児の吾身"とは、孤女学院に引き取られた震災孤女「おつた」がモデルである。	明治30年刊	当館蔵
51	『一葉舟』	島崎藤村著	明治31年刊	当館蔵
52	『夏草』	島崎藤村著	明治31年刊	当館蔵
53	『落梅集』	島崎藤村著　藤村最後の詩集	明治34年刊	当館蔵
54	藤村自筆掛物	『落梅集』の「小諸なる古城のほとり」が揮毫されている。		個人蔵
55	写真　「明治学院校歌」	島崎藤村作詞　前田久八作曲	明治39年	馬籠藤村記念館提供
56	写真　小諸の女子学舎　卒業写真	後列左端が藤村	明治36年撮影	当館蔵
57	写真　小諸義塾の卒業記念	後列左端が藤村		当館蔵
58	藤村自筆掛物	『落梅集』の「寂寥」の一部が揮毫されている。		個人蔵

59	『破戒』	島崎藤村著	明治39年3月刊	当館蔵
60	新紀元第7号『破壊』の評	木下尚江著	明治39年5月10日発行	山田貞光氏蔵
61	写真 「『破戒』刊行の年神津家の庭にて」	右より、藤村、神津猛、田山花袋、鮫島晋、神津てう（猛の妻）、中沢べん（てうの姪）。	明治39年11月	馬籠藤村記念館提供
62	写真 『破戒』	ロシア語版	昭和6年刊	馬籠藤村記念館提供
63	『家』 上巻	島崎藤村著 家族制度の下に生きる血族を描いた、自然主義文学の傑作。	明治44年刊	当館蔵
64	『家』 下巻			当館蔵
65	写真 「明治41年夏、両国川開きの日、浅草新片町の写真館で」	前列右より秦カツ（妻冬子の妹）、冬子、楠雄、蔦子（長兄秀雄の次女）、一人おいて高瀬操（甥鎮夫の妻）、抱かれているのは鶏二、後列右より、島崎こま子（次兄広助の次女）、ひさ（広助の長女）、いさ子（秀雄の長女）	明治41年夏	当館蔵
66	写真 北村透谷			堀越宏一氏提供・町田市立自由民権資料館協力
67	『春』	島崎藤村著 藤村最初の自伝的小説。この小説に登場する青木のモデルが北村透谷と言われ	明治41年刊	当館蔵
68	複写 「女学雑誌」303号	「厭世詩家と女性」が掲載された。	明治25年発行	臨川書店復刻 国立国会図書館蔵
69	写真 相馬黒光			株式会社中村屋提供
70	『穂高高原』	相馬黒光著	昭和19年刊	個人蔵
71	『黙移』	相馬黒光著	昭和11年刊	山田貞光氏蔵
72	写真 ビバリ・ボース夫妻 「木下尚江様 ラッシュ・ビバリ・ボースより心から敬意をこめて 1920年8月2日」	相馬愛蔵・黒光夫妻はインド独立運動の志士ビバリ・ボースを官憲から保護した。夫妻の長女俊子はボースと結婚した。		木下家蔵
73	写真 石井亮一			滝乃川学園石井記念文庫提供
74	写真 石井筆子			滝乃川学園石井記念文庫提供
75	写真 滝野川村時代の学園（室外遊戯）			滝乃川学園石井記念文庫提供
76	写真 「濃尾大震災写真帖」中の高富町破壊状況	明治24年10月28日 美濃尾張中心に激震がおそった。マグネチュードは8.0、世界でも最大級の内陸直下型地震であった。地震は西は九州全土に、東は東北地方まで達し、死者は全国で7273人、全壊・焼失家屋142000戸という大きな被害をこうむった。	明治31年ころ	岐阜県歴史資料館提供
77	「有志寄附簿」	孤女学院への寄附者および寄附金額を石井亮一が学院創立当時から記した帳簿。島崎春樹（藤村）の名前が見える。	明治25年～31年	滝乃川学園石井記念文庫提供
78	複写 「滝野川孤女学園を訪ふ（上）」	毎日新聞 木下尚江記事	明治32年3月24日	国立国会図書館蔵
79	複写 「滝野川孤女学園を訪ふ（下）」	毎日新聞 木下尚江記事	明治32年3月25日	国立国会図書館蔵
80	『石井筆子の生涯』	大村市・石井筆子顕彰事業実行委員会		当館蔵
81	複写 「普通選挙ヲ請願スルノ趣意」		明治30年7月	山田貞光氏蔵
82	写真 石川半山・木下尚江 他	上段右が半山、下段右が尚江。半山は、明治27年長野松本の「新府日報」の主筆を勤め、島田三郎の毎日新聞などの記者も勤める。		木下家提供
83	複写 『信濃富国論』原稿	木下尚江自筆原稿	明治24年長野にて執筆	早稲田大学文学学術院提供
84	複写 島田三郎			国立国会図書館のホームページ画面から転載

85	『廃娼之急務』	島田三郎・木下尚江著 共著だが、本文は全て尚江の執筆といわれる。	明治33年刊	山田貞光氏蔵
86	「自由党の『存娼』運動（一）」	木下尚江自筆原稿　毎日新聞所載とある。	明治33年7月14日	木下家蔵
87	複写　「少女我社に来る汚れし社会を厭ひ吉原遊郭を逃れて」	木下尚江記事　毎日新聞	明治33年3月7日	国立国会図書館蔵
88	『火の柱』	木下尚江著	明治37年刊	松本市歴史の里蔵
89	'Pillar of Fire'	「火の柱」の英語版	昭和47年刊	松本市歴史の里蔵
90	『良人の自白』　上・中・下続編	木下尚江著	明治37年　上刊	松本市歴史の里蔵
91	写真　日刊平民の筆禍に係る石川、山口、弐兄の下獄記念		明治40年5月	木下家蔵
92	写真　木下尚江	明治38年7月28日幸徳の出獄を迎えた。	明治38年7月28日	木下家蔵
93	写真　幸徳秋水			四万十市立図書館提供
94	写真　「社会民主党の創立発起人」	前列左から安部磯雄、幸徳秋水、片山潜、後列左から河上清、尚江、西川光二郎	明治34年5月	法政大学大原社会問題研究所所蔵
95	複写　「戦争の影」	平民新聞　木下尚江記事	明治37年2月28日	国立国会図書館蔵
96	複写　「軍国時代の言論」	毎日新聞　木下尚江記事	明治37年2月25日	国立国会図書館蔵
97	複写　「世界平和に対する日本国民の責任（上）」	毎日新聞　木下尚江記事	明治32年3月17日	国立国会図書館蔵
98	複写　「咄々怪事社会民主党禁止せらる」	毎日新聞　木下尚江記事	明治34年5月21日	国立国会図書館蔵
99	複写　「非軍備論」	毎日新聞　木下尚江記事	明治36年5月19日	国立国会図書館蔵
100	複写　「同志の面影　△木下尚江君」	平民新聞 幸徳秋水らが尚江を紹介した。	明治36年12月20日	国立国会図書館蔵
101	複写　「新紀元創刊号」	明治38年11月10日新紀元が刊行される。尚江は、巻頭で「日本国民の使命」と「目前の二大急務」の2本の論文を掲載した。二大急務は、「万国平和会議の提唱」と「普通選挙の実施」であった。全13号。	明治38年11月10日	国立国会図書館蔵
102	『うたたね』　新小説第2年　第12巻	島崎藤村著	明治34年11月刊	馬籠藤村記念館蔵
103	複写　『一夜の仮寝』	尚江自筆原稿	明治30年5月上旬	早稲田大学文学学術院提供
104	『安曇野』　第一部～第五部	臼井吉見著　筑摩書房刊行	第1部は昭和40年刊	個人蔵
105	写真　田中正造			木下家提供
106	写真　田中正造と尚江	中央が尚江。その右が田中正造	明治43年	木下家提供
107	田中正造自筆額	「至誠」		木下家蔵
108	田中正造が尚江に贈った扇面	「妻を叱るものは即ち其妻に叱らるる人ならん」	明治42年7月	木下家蔵
109	田中翁の歌	木下尚江筆		木下家蔵
110	『足尾鉱毒問題』	木下尚江著 毎日新聞の尚江の記事を編集したもの。	明治33年刊	山田貞光氏蔵
111	複写　「足尾鉱毒問題（2）」	毎日新聞　木下尚江記事	明治33年3月7日	国立国会図書館提供
112	複写　「田中正造翁の入獄を送る）」	毎日新聞　木下尚江記事	明治35年6月16日	国立国会図書館提供
113	『田中正造翁』	木下尚江著	大正10年刊	山田貞光氏蔵
114	近代日本キリスト教文学全集　3巻	木下尚江『火の柱』、島崎藤村『桜の実の熟する時』の2作が収録されている。	昭和50年刊	個人蔵

115	複写　『桜の実の熟する時』原稿		馬籠藤村記念館蔵
116	『桜の実の熟する時』	島崎藤村著 藤村の明治学院での学生々活が生々と描かれている。	大正8年刊
117	『懺悔』	木下尚江著	明治39年刊
118	『荒野』	木下尚江著	明治42年刊
119	『霊か肉か』上	木下尚江著	明治40年刊
120	『霊か肉か』下	木下尚江著	明治41年刊
121	藤村愛用品　単衣	昭和3年藤村と加藤静子の結婚の際に加藤家から記念に贈られた芭蕉布でできた単衣。 左の「明月」とともに、藤村と静子夫人が婚約時に交わした言葉を書にしたものと伝えられる。 「夕陽無限好唯是追黄昏」	
122	藤村自筆掛物	島崎静子 「明月」	昭和3年
123	島崎静子　自筆掛物	右が正樹	昭和3年
124	写真　島崎正樹	正樹自筆	明治10年頃
125	「島崎家訓」	島崎藤村著	明治18年
126	『夜明け前』	正樹自筆	昭和7年　第一部刊
127	「千字文」	島崎静子 「あとがき」「処女地」発行の感想が書かれている。 翌年10号で終巻した。	天保9年
128	島崎静子　自筆原稿		
129	「処女地」　第一号		大正11年創刊
130	『藤村　妻への手紙』	伊藤一夫宛 藤村愛用の単衣について書かれている。 「静楽」と印刷してある。	
131	島崎静子書簡		
132	岡田虎二郎　額		
133	写真　岡田虎二郎		
134	写真　伊香保にて	右から深沢利重、一人おいてみさ子、尚江（しゃがんでいる）	明治39年
135	静座水曜会		
136	木下尚江の写真		大正2年7月30日
137	定期券	駒込―日暮里間	大正12年3月14日発行
138	『岡田式静坐法』	尚江の「余が思想の一大転化は静坐の賜り也」が掲載されている。	明治45年刊
139	尚江　自筆掛物		
140	尚江書簡	林廣吉宛 当時林廣吉は、新聞記者。尚江から指導を受けていた。	昭和8年1月30日付
141	尚江　「写経」	「般若波羅蜜多心経」が写経されている。	昭和6年
142	尚江　「写経」	「信心銘」が写経されている。	昭和7年
143	写真　『新約聖書』	尚江愛用品 見返しに「父なる神」と揮毫されている	昭和4年10月11日

115	馬籠藤村記念館蔵
116	馬籠藤村記念館蔵
117	松本市歴史の里蔵
118	山田貞光氏蔵
119	山田貞光氏蔵
120	山田貞光氏蔵
121	当館蔵
122	当館蔵
123	当館蔵
124	馬籠藤村記念館提供
125	馬籠藤村記念館蔵
126	当館蔵
127	馬籠藤村記念館蔵
128	当館蔵
129	当館蔵
130	当館蔵
131	当館蔵
132	木下家蔵
133	木下家提供
134	木下家蔵
135	松本市歴史の里蔵
136	木下家蔵
137	木下家蔵
138	山田貞光氏蔵
139	当館蔵
140	木下家蔵
141	木下家蔵
142	当館蔵
143	木下家蔵

144	『法然と親鸞』	木下尚江著	明治44年刊	山田貞光氏蔵	
145	『日蓮論』	木下尚江著	明治43年刊	山田貞光氏蔵	
146	尚江　自筆書画　（5枚）			当館蔵	
147	尚江愛用品　数珠		昭和7年	木下家蔵	
148	写真　島崎藤村	麻布飯倉片町の自宅にて。		馬籠藤村記念館提供	
149	『浄土宗聖典』	藤村愛用品 望月信道編　無我山房発行	大正11年11月10日発行	馬籠藤村記念館蔵	
150	『藤村いろは歌留多』（復刻版）	岡本一平画 「いろはかるた　版権解放の阻止　この金は貧者へ」と近代文学館所蔵の「夜明け前」ノートにメモが残る。	昭和2年刊	当館蔵	
151	『島崎藤村コレクション　第2巻　知られざる晩年の島崎藤村』	青木正美著　国書刊行会発行 全16曲中に藤村作詞「椰子の実」「朝」の2曲が入っている。その他「日本よい国」「祖国の柱」などが収録されている。	平成10年9月22日	当館蔵	
152	『国民歌謡選集』		昭和12年6月10日刊	個人蔵	
153	『勅語勅諭集』		昭和18年2月20日刊	個人蔵	
154	「雑記帳」	藤村の晩年の創作ノート2冊を昭和18年に藤村の甥の一郎が写したもの。 （上）　最後のページに「一郎写」とある。 （下）「一本質へ・・・」と東方の門の創作メモが写されている		当館蔵	
155	尚江　自筆掛物	「上善如水」と揮毫されている	昭和12年元旦	木下家蔵	
156	尚江　自画像	「如露如電」	昭和12年10月30日	木下家蔵	
157	尚江　辞世の句	「何一つもたで行くこそ故さとの無為の国へのみやげなるらし」 「無為の国」とは、岡田虎二郎の「静坐無為国」（治めずして治まる国）	昭和12年10月29日	木下家蔵	
158	河上肇書簡	木下正造宛 尚江の昇天のあと、息子の正造に宛てられた書簡。尚江の講演の思い出などが書かれている。河上肇はマルクス経済学者。元京都大学教授。	昭和12年12月18日付	木下家蔵	
159	息子正造への葉書　（5枚）	尚江は、晩年の昭和12年（1937）早稲田大学を卒業し働く正造へ毎日葉書を出した。	昭和12年3月～6月	木下家蔵	
160	写真　木下尚江	西ヶ原の自宅にて。	昭和11年12月9日	木下家蔵	
161	尚江著　『神・人間・自由』	「神の解放」「幸徳秋水と僕」「政治の破産者　田中正造」「自由の使徒　島田三郎」「文学の未だ無かった早稲田」など12編からなる。	昭和9年刊	松本市歴史の里蔵	
162	複製　『桜の実の熟する時』の原稿	島崎藤村著		馬籠藤村記念館蔵	
163	写真	右より、みさ子、正造、尚江、純枝	大正3年	木下家提供	
164	写真	フランスより帰国して東京芝二本榎の島崎広助（次兄）宅にて、右より藤村、鶏二、楠雄、島崎やよ（広助の義母）、重樹（広助の長男）、権藤誠子（藤村の弟子）、島崎こま子（広助の次女）		馬籠藤村記念館提供	